

恋の白牡丹

— 魂の叫び、鷗外の子を生んだ女 —

桜田靖

始めに

明治・大正期の文豪森鷗外が、お気に入り
の女中の木村モトに生ませた遺児「森清」過
去帳は、北九州市門司区老松町に所在の「真
宗三光寺」に現存します。それは、木村モト
の私生児として記載されています。

「森清」の墓は、木村モトの義理の兄だっ
た川村正人の家の墓域にあります。当初は門
司港の近くにありましたが、関門橋の架橋の
際に、同市門司区大里に所在の城山共同霊園
に移転し、奥まった川村家の墓域で幼い魂は
永遠の眠りについています。

母親の木村モトは、生家だった福岡県行橋
市今井に所在の浄喜寺（旧善徳寺・庭松庵
跡）の墓域に、姉のデンと一基の姉妹墓に眠
っています。ここに薄幸だった母子を偲んで
みしました。

これが真実なことは、推理作家の松本清張も教えられて文芸春秋の担当社員に調査を頼み確認もしていました。

早速、文芸春秋で「削除の復元」という小説にして掲載されましたが、それを読んでがっかりしました。

松本清張は、森鷗外の「小倉日記」を素材とした『或る「小倉日記傳」』で栄えある芥川賞を受賞し、それが推理小説の大御所になる出世の糸口となりました。

ゆえに、松本清張は、大恩ある森鷗外の醜聞の真実は書けませんでした。

だが、真実を歪めるのは文学史の否定であり許されないと思います。松本清張は、鷗外の隠し子「森清」の過去帳もその墓の所在も知りながら、それが福岡県の苅田町に伝わる「浮説」だとそれ自体が根も葉もない虚仮を創作してうやむやにしていきました。

しかし、鷗外の隠し子の墓石は、現実に門司に存在しますから、それでは作家として卑

怯・無責任な振舞だと存じます（著者記）

— 序に代えて —

「痛い！痛い！もう、やめてくださいませ！
旦那様！」

わたしは毎晩のように犬畜生みたいに四つ
ん這いの屈辱的な恰好で姦淫され、泣きなが
ら懇願していました。酒に酔った新婚の夫は、
そんなわたし髪の毛を引っ張り首筋に噛み付
いて興奮し、勝手に一人で果ててしまうので
した。

「お前の裸は白い牡丹の花みたいにポツテリ
して気持ちの良かっちゃ」と呟くと夫は呑気
に鼾をかいて眠りに落ちてしまいます。時は
明治三十二年五月のこと、身を寄せていた行
橋今井の叔父夫妻の家から無理矢理に嫁がさ
れてこの方、わたしには地獄の日々の連続で
した。八月のある日の白昼、家人が昼寝の夢
をむさぼっている隙に、わたしは青い稲穂が
波打つ炎天の野道を髪の毛の乱れも忘れて急ぎ、
叔父夫婦宅へ遁走しました。

「ここに置いてくださいます。以前のように小学校でお裁縫と礼儀作法を教えて暮らしたいのです」と涙目で訴えました。

「それじゃ、わしの義理が立たんよ。お前も婚家から逃げた女で世間の笑い者じゃ」と叔父は木魚みたいな瞬きもしない眼でわたしを睨みつけました。もう、わたしは我慢なりません。長居は無用と着の身着のまま夢中で走り、行橋駅から門司港の姉の嫁ぎ先の川村家に庇護を求めて飛び込んだ次第でした。

一

申し遅れましたが、わたしの名は木村モト、その折は十九でした。姉の名は川村デンで七つ年違い、わたしが十一の年に嫁いで行きました。その翌年に母が亡くなり、又年が明けて母の後を追うように父も病没しました。両親を失ったわたしと腹違いの妹のイツは、母方の叔父の末次家に身柄を引き取られたのでした。でもイツには許婚《いいなずけ》がいて、いずれお寺のお嫁さんになる身でしたか

らまだ幸せです。わたしは所詮淋しい影を引きずって生きねばならない定めだったので。

「思うに親父達が長州の奇兵隊に負けて、お城を焼かれたのが小倉藩士の運命の潮目だったな。殿様以下みんなが京都郡辺りに散り散りになってご維新になったら、武士もヘチマもなくなっただのさ。オレの親が行橋の外れまで落ち延びて、デーンと巡り合えて夫婦になったのも何かの因縁だろうな。世が世ならば煙草の商いなんて胸くそ悪いものよ」と義兄の川村正人は先から仏頂面のままでした。

「木村の父も小倉藩士だったのよ。行橋今井まで逃げて、ご維新で刀を棄てた手で慣れない鍬《くわ》を握って田畑を耕して暮らすなんて、いつときは腹を切ろうと思ひ詰めたそうだけど、時代の移りを悟って恥を忍んで生きたそうよ。そのうちに大寺の善徳寺の寺家の住職の口を世話する人がいて、わたし達は育ったのよ」と姉も昔話をしんみりとしました。わたしは煙草の商いの口銭の稼ぎで不自

由ない川村家に身を置いて、職業斡旋業者から仕事の紹介を待つことになりました。

二

九月に入って最初の雨の土曜日、斡旋屋の女将さんは番傘を傾げ道々教えてくれました。

「陸軍少将相当の偉い軍医さんのお屋敷だよ。それだけでなく、先生は日本で一、二番の有名な小説家なのだよ。そこで家事手伝いができるのは、この上ない名誉なことだよ」

昨日から降り続く雨の中、水溜りに気を付けながら、わたしは何度も相方の顔色の悪い少女の顔を盗み見ました。その日の空模様そのものの泣き顔が気にかかりました。かつての侍《さむらい》町の鍛冶町はひっそり初秋の雨に濡れそぼっていました。とある生垣と竹藪に囲まれたお屋敷の門を入りました。右手のお庭の百日紅の花が雨に煙るのを横目に女将さんに従って細長い石畳を幾つか踏んで玄関に着き傘を畳むと一息つきました。

「生憎の雨の中、ご苦労！」と噂の森鷗外先

生が待っていました。伶俐な顔貌に立派な口髭《ひげ》をつけた先生は頭髪を七三に分けて整え、威儀を正していらっしゃいました。

「木村モトは数えで二十歳、門司から来ました。両親はとうに鬼籍です。小学校で礼儀作法と裁縫を教えていましたが、後見の叔父夫婦が婚姻を強いたのが気に入らず家事手伝いの仕事を希望しました。吉田春は年十四で大分県出身です。紡績工場の工女でしたが、仕事がとっても過酷で耐え切れず、こちらの仕事を選びました。春の父母もすでにいません」と女将さんは滑らかな口調で型通りの紹介をしました。この時、鷗外先生は壮年三十七の独身、母や先妻の子を東京に置いての単身赴任でした。先生は大した家事の量もないのに、陸軍少将相当の高官の身ゆえに、下女風情と妙な房事の噂が立つのを警戒していました。お屋敷には他に馬の世話係の寅吉さんがいましたが、この人は別当小屋で馬と一緒に寝泊りするのです。前任のお手伝い女は、

愛嬌のある働き者で先生の大層なお気に入りで
あったそうです。この夏に庭で行水の裸姿を
家主の宇佐美家の奥様にたまたま目撃されて、
もしや身ごもっているのではと先生に告げ口
されたそうです。先生がことの真実を問い詰
めたら、妊娠については肯定も否定もしない
で、もう恥ずかしくてここにいられない、と
その日のうちに郷里の熊本へ去ったそうでした。
これまで雇いの女は一人だけだったから、
鷗外先生の頼みで、夜だけ家主の宇佐美家の
お手伝い女が来て、女二人で就寝させていた
のですが、家主の家の女は鷗外先生の家が仕
事は楽な上に給金も多いことを聞き出し、何
と辞めて師団長の井上中将宅に雇われたので
した。宇佐美家の主人はすっかりへそを曲げ
て、もうお手伝いの女を派出しないそうでした。
わたしと吉田春の二人が即座に雇われた
次第です。

三

雨天が続きました。秋の長雨で心底から鬱

陶 し い の か 、 春 ち ゃ ん は ほ と ん ど 笑 顔 一 つ 見
せ ず 、 わ た し の 傍 ら で 炊 事 や お 掃 除 な ど 一 緒
に し ま し た 。 雨 が 小 降 り に な る と ブ ー ン 、 ブ
ー ン と 隣 家 か ら 糸 車 の 回 る 音 が 聞 こ え ま し た 。

「 お 姉 さ ん 、 わ た し 寂 し い よ 。 も う お 家 に 帰
り た い よ 」 と 春 ち ゃ ん は 涙 を こ ぼ し て す す り
泣 き ま し た 。 鷗 外 先 生 は 乘 馬 姿 で 出 仕 さ れ ま
し た 。 通 常 、 朝 は 九 時 に 師 団 本 部 に 入 り 、 午
後 は 三 時 に 退 出 し て 戻 ら れ ま し た 。 お 見 送 り
と お 出 迎 え も わ た し 達 の 仕 事 の う ち で し た 。
春 ち ゃ ん の 表 情 が 暗 い の を 早 々 に 不 審 に 感 じ
た 先 生 が 、 そ っ と わ た し を 呼 ん で 訊 き ま し た 。

「 春 さ ん は 生 ま れ た 里 に 帰 り た い そ う で す 」
「 そ う か 。 二 親 が い な く て も 帰 り た い の か 。
故 里 と は そ ん な も の か な 」 と 先 生 は 呟 く と 書
物 を 広 げ ノ ー ト に 書 き つ け を 始 め ら れ た の で 、
わ た し は 余 計 な 口 を 利 か ず に そ っ と 引 き 下 が
り ま し た 。

九 月 七 日 に な っ て も 雨 は 降 り 止 み ま せ ン 。
こ の 一 週 間 は 雨 天 の 連 続 で し た 。 わ た し は 緋

《かすり》を買って蒲団をつくるように言いつけられました。裁縫は得意ですから退屈しのぎに喜んで作業に取り掛かりました。そんな時、例の女将さんが新たにお手伝い女を連れて来ました。竹久ヒサという名で、わたしより幾つか年下の人でした。春ちゃんは雨の中を泣き顔でお暇して行きました。翌日のお昼過ぎになって、ようやく晴れた秋空が出現しました。翌くる九日は十四連隊の軍旗祭に列席のため、先生は早朝から博多の香椎に汽車でお出かけになられ、お帰りは夜遅くでした。

翌朝、先生がタンスの金銭の紛失に気が付かれ、わたし達を呼びつけて詰問されました。これから所持品の全てを検査すると言いつけられたら、もうヒサさんは堪えきれずに、盗んだお札を着物の帯の下から取り出しました。先生はヒサさんに、今すぐにこの家から出ていくように命じられました。

「モトよ、一緒に疑って悪かったね」と鋭い

先生の目付きが一転して、わたしは優しい言葉
を頂き幸せな気分になりました。

四

わたしは先生と一つ屋根の下に暮らす日々
となりました。お酒を召されて深夜にお帰りの
日もたまにはありました。そうでない日は、
夜の十一時頃までアンデルセンの『即興詩
人』のドイツ語版を邦訳していらっしやる
のことでした。十八日の月曜日、何の前触れ
もなく末次の叔母ハナが訪ねて来ました。大
阪の実家に帰る途中で下車したと熊本の球磨
川産の鮎を持参していました。生憎と先生は
小倉北方《きたがた》の歩兵隊に巡閲に出か
けられ留守でした。叔母はわたしに世の中に
は義理というものがあるから一度は婚家に戻
るように説教しました。わたしはその夫が蛇
蝎のように大嫌いですから、それだけは固く
お断りしましたら、叔母は混迷な表情を隠さ
ず汽車の時間があるからとそそくさ駅へ向か
いました。

お彼岸の入りの頃、庭の紅い百日紅の見事な花盛りで、来訪者がしきりに感嘆していました。彼岸の中日は前日から雨が止まず、おまけに大風も吹き荒れましたが、わたしは先生にお萩を作って差し上げました。

「お萩かね。春の彼岸は同じものでも牡丹餅《ぼたもち》と言うのだよ」と食べながら、「モトの肥えた身体は白い牡丹の花のようだな」とやや片頬を緩めて軽口を叩かれました。でも、すぐに威儀を正したいつもの実直な顔付きに戻られて、別に色好みの陰など微塵もありませんでした。月末も近づいた二十七日から、先生は熊本方面へ出張され、帰途には久留米や大宰府に寄りながら、十月四日の夜にお帰りになりました。

五

十月十二日、先生が師団から帰宅なされた頃を見計らったように青年が訪ねて来ました。先生と同じ石見の生まれの福間博と名乗り面会を乞いました。先生にお目通りが叶うと早

速ドイツ語のご教授を願い出ていました。先生は傍らのドイツ語の書物をその方に読ませて、実力を試しているご様子でした。この福間青年は先生に語学力を認められ、それから夕方に一時間程ドイツ語の勉強にお見えになりました。後に出世して第一高等学校の教授になられたそうです。

十月十五日の日曜日、明け方から小降りに時雨れていましたが、お昼頃から晴れ間が見えるようになりしました。わたしが玄関に出てみたら軒下に大きな蝦蟇蛙《ガマガエル》がかれこれ三時間も這い蹲ったままいました。わたしが幾ら追い払おうとしても逃げる素振もなく、あまりにも気味が悪くて先生に申し伝えました。

「蛙の皮膚は敏感に気圧の変化を感じ取るものだ。奴らが屋内に入ろうと身構えている時は大風の前兆なんだよ」と先生は涼しい顔でした。果たして深夜から大嵐で庭木の梢を吹き鳴らす風の音が怖くておちおち眠られぬ一

夜になりました。二十二日の日曜日、役所からの訪問があり、先生はこの地の名誉教育会員をお受けになり、以後学校などでの講演依頼を数多くお受けになりました。月末近く、職業斡旋所の女将さんが長く欠員となっていたわたしの相方のお手伝い女を連れて来ました。十七歳の田村ハマさんで、大分の農家の子でしたが、東京の麻布にいたこともあるそうでした。額の秀でた賢そうな顔付きをしていましたが、御用聞きの若い男の子なんかに色目を使って媚び、わたしが制止するのも無視して従前の倍ほども、米でも魚でも野菜でも味噌でも醤油でも油までも注文するのです。わたしもさすがに黙っておれずに文句をつけたら、

「ここは将官の家でしょう！ケチケチすることないですよ」と反駁してもう始末に負えませぬ。ハマさんは先生やお客様の前ではお行儀良く良い子ブリッコしていました。でも、わたしと二人だけの時は、食いしん坊でお菓

子なんかを食べ散らかしてひどいものでした。

十月の晦日《みそか》の日に姉のデンが訪ねて来ました。鷗外先生が外出中のことで、コーヒーの一缶を手土産に持参して来ました。

「お姉さん、実を言うと六月頃から月のものがずっと止まったままなのよ」とずっと気懸かりだったことを身内ゆえに打ち明けました。

「まあ、それって前の亭主の胤《たね》なのね」と姉の色白の顔に血の気が走ったようでした。

「もう五ヶ月にもなるわ」とわたしは顔を伏せたままあげられませんでした。

六

十一月に入ってから急に冷え込み、庭に秋霜の立つ朝もありました。先生は小倉の人との交遊の輪が広まって、お勤めの内外を問わずお出かけのことが増えました。錦秋の足立山を越えて吹いてくる風の冷たい十三日の月曜日のこと、食いしん坊のハマさんは、例によって柿の実を内緒で食べていて、先生が今日は

珍しく時間通りに帰宅されているのも忘れ、剥いた皮をポンと秋花の咲いた花壇に放り投げたのです。それがちょうど小用に立っていた先生の眼に留まり行儀が悪いと叱られました。

「お前は人前では良家の子女のように装うけれど、陰では娼婦の如き振る舞いをしてお里が知れとるぞ！この家にそんな陰日向のある手伝い人は無用だ。今すぐにでも出て行きなさい！」とそれは大層な剣幕で、わたしは側でおどおどしているだけでした。ハマさんは、一応玄関まで見送りに出たわたしに昂然と言いき放ちました。

「あなた、これからどうなさるの？」とお愛想に聞きました。

「早くから考えていたけど、ここの先生よりももっと偉い西部都督の黒木中将のような方に仕えたいわ。でも、その旦那さんがわたしを妾にしようなんて考えるのなら、こちらから願い下げよ」と黒い瞳が生意気そうな光り

ようでした。黒木中将も又独身であり、この娘の真の狙いは、身分の高い人の妻の座に収まることかと思いましたが。わたしには大層畏れ多いことに思われました。十月十五日、あらかじめ手紙で知らせていた通り、末次の叔母ハナが再度やって来ました。わたしは叔母と並んで鷗外先生に向かい合いました。叔母は、小学校の道徳教師然として、わたしに婚家に戻るように世の中の義を諄々と説きました。

「あんな獣《けだもの》みたいな男の家に戻るくらいなら、わたしは毒を呷って死んだ方がましですよ」とキツパリと拒否しました。鷗外先生がよくしてくださるこの家での暮らしが大変気に入っておりました。叔母も漸く諦め顔になり先生に対して、

「モトは幼い時に姉が嫁に出て、両親も相次いで亡くなり貧乏暮らしを余儀なくした可哀想な境遇の娘です。今、高貴なご身分にして高名な先生にお仕えさせて頂いて親族として

光栄に存じております。でも、ひとつだけご了承ください。承頂きたい儀がございます。モトは前夫の子を腹に宿しております。恐らく来春には出産の身ですが、それでもかまいませんでしょうか？」と叔母は色白の才気溢れる顔で膝を乗り出さんばかりに言い寄りました。

「何ら支障ない。わたしは医師だから、妊娠についての見識がある」

鷗外先生は泰然とわたしを庇《かば》ってくださいました。わたしは嬉しくて先生の逞しい体に縋り付いて泣き出した。衝動を覚えました。わたしの身ごもりのことは、姉が憂慮して末次の叔父叔母に伝えたことなものでしょう。

七

先生が小倉に赴任になっておよそ半年が過ぎて、すっかり市井の人々に溶け込まれたようでした。日曜日など来客がひっきりなしでした。来訪の人々のほとんどが師団軍医部長森林太郎でなく、文豪森鷗外その人を敬慕し

て寄って来ているようでした。普段の先生は宵の八時頃になると葉巻をくわえて散歩にお出かけになりました。時間にして約一時間、ちょうど葉巻一本を吸い終えた頃にお戻りでした。その後は書物とノートを傍らに、例の翻訳に没頭されていまして。十一月末になると霽《みぞれ》が降る日もありました。二十七日の夜は進級した軍医さん達のお祝いで、先生が大層お気に入りの美人姉妹三木ユキさんとトクさんのいる京町の洋食店『三樹亭』で痛飲されたようでした。したたかに酔っ払った先生は帰宅するや否や床に伏されて夢心地の大鼾《いびき》で眠られました。返って深夜に目覚められ、酔い醒ましに戸外に出られました。わたしも放っておけずに遅れて寝間着に上っ張りを羽織って外へ出ました。星の夜の闇に薄っすら霜が降りていまして。先生はお庭の上の星じっと眺めていらっしやいました。

「モトや、いらぬ心配をかけて済まん。犬

の遠吠えで目が覚めてな、まさに星蘭干の夜半だな。星は死んだ人の魂のように冷たく光るものだ」としばし天を仰ぎ、やがて星明りの足立山に視線を移されてから家の中に入られました。先の日清戦争に出陣し戦没された知り合いの兵士の方々を偲んでいらっしやっただのしょうか。

明治三十二年も師走となりました。先生は馬借町のキリスト教会のベルトラン神父と親しくなられフランス語を学ぶことになりました。それに師団長にいわれて、将校クラブでナポレオン軍を何度も撃破したドイツの偉い軍人さんの『戦争論』の連続講座も始められたそうでした。歳末も押し迫った二十九日、風雨の激しい中を職人さんが来て門松飾りをつけました。その晩、旧交のあった東京の洋画家の訃報があり、先生は書き物の手を忘れたように長いこと窓の雨に目を凝らしていらっしやいました。

大晦日は新年の宴会の仕度で、莫産《ご

ざ》を敷き薦被りの樽酒を据え、柄杓を添えて、酒の肴《さかな》にスルメを何十枚も供えました。夕方からは雨となりました。夜も更けた頃に年越蕎麦を差し出しました。先生が蕎麦を啜るのを御相伴していると窓の外は曇《みぞれ》に変わっていました。こうして明治三十二年は先生と二人だけで深閑と果てて行きました。

八

明けて明治三十三年の元旦、先生は風が吹き雪の舞う中を師団将校クラブでの賀正の儀に列席のために乗馬で向かわれました。お戻りのお昼過ぎにはお屋敷に年賀の客がひきもきらず、わたしは祝い酒の振る舞いで大童でした。先生は祝賀のお客様が部屋に入りきれず、お庭にまで満ちているのに仰天されていました。松の内は毎日のように雪が降りました。正月気分も抜けたある晩、わたしはいつものように先生が書き物をしている隣の間で退屈凌ぎに縫物をしていて、うっかり「アア

～」と声をあげて欠伸をしてしまいました。

「モトや、そっちの部屋は寒いだろう。こっちに入りなさい」と襖の向こうから先生が声をかけてくださいました。わたしはご遠慮申し上げたのですが、再々にわたり催促されるので、ついついお部屋にお邪魔しました。

そこは大きな火鉢の火の気があり格段に暖かく感じました。わたしは隅っこに座って縫物続けました。先生はしばらくして書き物の手を休めると、

「今夜も雪が降っている。モトの体みたいに大きくて柔らかそうな牡丹雪だぞ」と珍しく軽口を叩き振り向かれたお顔は、いつもの謹厳さの抜けた慈愛に満ちたもので嬉しくなりました。わたしが白く肥っているのをからかわれたのだと思いました。

十四日の日曜日、霰《あられ》がパラパラと落ちて大風が荒れる中を姉のデンが訪ねて来て、居合わせた鷗外先生にご挨拶をしました。

「あなたも行橋の叔母さんみたいにな上背があり色白ですな」と先生は機嫌よく応対しました。姉は通り一遍の挨拶の口上を申し上げると、身の上を語り出しました。

「主人は門司の煙草商人ですが、出自は小倉の小笠原藩士の家です。わたし達はお寺の三姉妹でした。父は行橋今井にある善徳寺というお寺の住職でした」と姉が大見栄を張ったのには内心吃驚しました。本当のところ、父は善徳寺の小さな末寺の庭松庵の和尚でした。姉はわたしの産気の具合が心配で来てくれ、わたし達の出自の確かさも自慢したのでした。姉の口利きのお陰で、二十日の日に雨の中、例の女将さんが又もやお手伝い女を連れて来ました。わたしと同年くらい、荒木タマという名で不細工な人でした。昼間から盗み酒をしてお猿みみたいに真赤な顔で先生の御帰邸を馴れ馴れしく出迎えたので、先生は露骨に不快感を顔に出して馬上から降りると、ずっと無言のまま玄関をお入りになりました。こ

の人が奉公して三日目のお昼前、わたしが台所に姿がないのを不審に思い家の内を探すと、タマさんは何と先生の机の引き出しをゴソゴソと物色していました。即座に咎め立てをしたら、それっきり逃げ去って戻りませんでした。

それで又、二十三日にお手伝い女が雇われる次第となりました。それが十七歳の平野マサさんでした。小柄で器量良しだから、今度こそ先生のお気に入りだと思いました。ところがマサさんは夜中にこっそりお屋敷を抜け出して朝帰りをするのでした。わたしが内緒で事情を訊いたら、自分は大阪の鍛冶屋の娘で雇いの鍛冶職の少年と恋仲になり、小倉まで駆け落ちして来たそうでした。夜中はこの情夫のもとに外泊していたのです。この人は炊事も洗濯もお掃除も不得手で全く役に立ちません。とうとう無断外泊を先生が知るところとなり、マサさんは直々に詰問を受けました。

「夫の実家は行橋にある御殿みたいな杉野家です。親戚筋に小倉の軍隊で見習士官をしている人もいます。夫は性病に罹って恥ずかしくて実家に帰れないので、わたしが介抱してあげて方々の地を彷徨《さまよ》い、小倉までやって来ました。杉野家の当主は騙《だま》されて事件に巻き込まれ、牢獄につながれたこともあります」などと声が襖越しに聞こえましたが、実に支離滅裂な話し振りでした。

「お前は恐るべきずる賢い嘘つき女だ。今日限り暇をやるから早々に出て行きなさい」と先生の怒声をはっきりと聞こえました。わたしのお腹はすっかり大きくなったのに又もや先生と二人だけの暮らしとなりました。

九

一月の晦日から二月の一日にかけて、久しぶりに冬晴れの好天気でしたが、二日の午後から又もや天候が崩れて雨が降り、翌日の節分は風も伴いました。四日の日曜日には雪が

降る中、わたしのお腹の子を心配して姉が泊りがけで来ました。だが先生は仮病の風邪を装い面会してくれませんでした。

実は、東京にいる東大医学部同期の友達から、先生の先妻登志子さんの訃報が届いていたのです。赤松海軍中将の令嬢でした。十七歳で森家に嫁入りしたのですが我が儘の言い放題、しかも先生の方が上野にある赤松家の持家に住み、お嫁さんの妹達どころか古くから同家雇いの老女までもが同居という、まるで養子状態だったそうです。登志子さんが漢書を白文のままスラスラと読める類稀なる才媛だったことも先生のプライドをマイナスに刺激したようです。登志子さんは、わたしの姉のデンや叔母のハナと同様に、背が高くて色白だったそうですけど、お面相は十人並みで先生のお好みではなかったようです。いずれにしても双方気が合わず、長男を授かりながらも一年足らずで離縁してしまいました。しかし先生は訃報に接すると、自分にも落ち度が

あり辛抱が足らなかつたと離別を惜しみ、可哀想なことをしたと悔やんで先妻の死去を嘆き悲しまれていたのです。

「モトちゃん、姉さんがすぐに何とかしてあげることから頑張りなさいよ」

翌朝、姉は大きなわたしのお腹を撫でると、風雪の舞う雪道を悄然と門司へ帰りました。八日になって、姉の計らいで行橋今井の十五歳になる腹違いの妹イツが手伝いに来てくれました。やはり、身内とは有り難いもので、天候も昨日までとは違って変わり、この日はわたしの心と同じく晴れ上がりました。

二月は雪が降ったり冬晴れになったりの落ち着きのない日々でした。来訪のお客様も数多かったのですが、イツがそつなく家事を支えてくれたので無事に過ごせました。

二十七日の夕方、姉が様子を見に来ました。先生はかねてより、三月は東京の軍医会議で長期出張が決まっていて、くれぐれもモトを頼むと姉に面倒見を依頼し、わたしのお産を

氣遣ってくれました。三月一日の早朝七時、先生は小倉駅から東京へと旅立たれました。途中門司で義兄の川村正人が先生に煙草を贈呈したと後日聞きました。

十

朝日が足立山の峰の上空に眩しく輝く三月二十七日の七時頃、先生は東京からお帰りになりました。姉は旅程を知らされており、前夜から泊りがけで待っていて、先生を玄関先にお出迎えしました。その際、わたしが未出産なのを告げたら、先生は今すぐに門司の助産婦の家に移すよう姉に言いつけになりました。イツには今しばらくここに留まり、家事を手伝うよう頼んでいました。先生のご帰倉を知って来客が増えるのは疑いなく致し方ない次第でした。

三月三十日の夜、姉が伝手を頼んで探した小倉生まれの老女安田サキさんを先生に紹介し、早速先生はお雇いになったそうでした。やっといつはお役ご免になり行橋今井の叔父

宅に帰れたのです。三月の晦日は一晩中大風雨が吹き荒れて産所の窓を揺さぶりました。一夜明けて四月一日の日曜日の昼間も風雨が続き、二日になって、ようやく陽春の候の訪れを感じました。

風雨ありて花開く、と昔から申します。わたしは四月四日に女兒を出産しました。確かに自分の腹を痛めて生んだ子に相違ありませんが、憎みて余りある前夫の胤であるがゆえに、この赤子に母親として親愛の情を抱くことを、わたしの母性が拒否しました。姉夫婦と相談し、結局川村正人・デン夫妻の生んだ長女川村ミツとして出生届がされました。

わたしは門司で産後の養生を済ませると、春雨の降る十五日に小倉鍛冶町の鷗外先生のお屋敷に戻りました。その日の朝に安田サキさんは、先生から盗みと虚言の譴責《けんせき》を受けて解雇されていました。何でも先生の留守を見透かしては、米や野菜を大きな風呂敷に包んで持ち出し、鳥町の娘婿の家に

運び込むのを常習としていたそうでした。そこが偶然にも師団の中原少佐の真向かいの家であったから、そのご注進により老女の盗人行為が明るみになったそうです。

先生の訊問に安田サキさんは、

「先生、濡れ衣ですよ。馬の世話する寅吉さんがモトさんを愛人にしているから、食料を持ち出して養っていたのですよ」としゃあしゃあと嘘をついて罪を他人に擦り付けていたのです。真に人はいないと陰で何を言われているのか、世の中は油断も隙もありません。わたしが平素から誠心誠意まめに仕えていたから、先生がそんな与太話を信じられるはずもありませんでした。

十一

再び、鷗外先生とわたしの暮らしが始まりました。十七日の春の大嵐の中、雨にびしょ濡れになった義兄川村正人がやって来て一泊して帰りました。わたしが生んだミツを、自分達夫婦の実子として出生届したことを言い

に来たのでした。二十日、裏の花壇の牡丹の花が見事に開きました。

「ぼてっと白い花だな。まるでモトみたいだぞ」

「そんなご冗談を！先生、わたしなんか花にたとえられるような女と違います」と含羞のあまり赤面する心地でした。

「誉めてやっているのだよ。昔から美人をたとえて、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は姫百合の花と言っただよ。三大名花なんだよ」と先生は珍しく謹厳な表情を緩めていらっしやいました。二十五日の雨天の中、姉が様子伺いに来て、ミツが順調に育っていることを告げました。翌二十六日には、行橋今井から末次の祖母が泊りがけで来ました。七十の祖母はひたすら畏まりながら、手土産に持参した煎茶器を先生に贈呈しました。

先生に陸軍省から呼び出しがあり、五月六日に小倉を発たれました。主な御用向きは皇太子殿下のご成婚式に列席のことでした。式

典後も東京のご家族や親友達と水入らずの時間を過ごされ、十五日の朝にお屋敷にお戻りになられました。二十日の日曜日、風雨の中を日清戦争に従軍の方が来て雄鶏を贈られました。それで雌鶏を買ってきて番《つがい》で飼うことになりました。

六月になり牡丹の花は散って、今度は芍薬の花が咲き誇りました。一日から先生は別府、大分、日田、耶馬溪方面へ徴兵検査の視察の旅にお出かけになり、お帰りは七日の夕刻でした。翌八日の金曜日に今度は祖父の末次傳六が訪ねて来ました。わたしが世間に高名な文豪森鷗外に気に入られて仕えているのが、親族として大変な名誉に思っている口振りでした。十一日から入梅したようで毎日のように小雨が降りました。この六月の半ばを過ぎて、先生の顔は憂いに沈まれる表情が増えたように感じました。五月に上京の折、東京の第一師団に栄転の内示を密かに口頭で伝えられていたそうですが、幾ら待っても正式の通

知が届かなかったからだと存じます。先生は
ずっと吉野号と松嶋号の二頭の馬を飼って
いましたが、十六日に小倉衛成病院長の庄田
さんの所望により、松嶋号をお譲りになり
ました。二十七日に代わりに北斗号をお買
いになり、新馬に乗って先生は久方振りに
晴れ晴れとしたお顔をなさいました。

十二

七月になっても雨天の連続でした。十二
日に陸軍の人事発令が公示され、先生の
一縷の榮転の夢はシャボン玉みたいに弾
けました。先生はお気に入りの美人姉妹
のいる洋食屋の三樹亭で接待の宴席を取
り持たれ、夜遅くのご帰邸も多々あり
ましたが、大抵は家で夕飯を召され、
宵を書き物で過ごされました。わ
たしはそっと頃合をみて、お茶を差し
出していました。ある時、書き物の手
を止めて、引き下がろうとするわたし
を呼び止めになりました。

「母からの便りがあったな。三十八にもなっ

たのだから身を固めたらどうかと煩いものだな。東京の家に新しく雇ったお手伝いの娘さんが、とっても賢くて顔もちょっとモナリザとか聖母マリア様にも似ているから、お嫁さんにしないかだっ」とお笑いになりました。わたしは相槌の打ちようもなく、黙って微笑んでいました。

「自分はその人を嫁さんにしても一向に構わないけど、身分にうるさい世間が許さないだろうと返事を出したよ。まことに身分とか家柄とか、世間とは面倒なものだな」と大きく溜息をつかれると再度書き物を始められたので、又隣りの間に戻って控えました。

お母様も先生も女の身分に拘らない方だと知って、下女とされる身分のわたしは嬉しく思いました。先生とわたしの間に立つ障壁は思っていたより意外に低いものに感じました。

十八日にようやく梅雨が明けて、夏空が広がりました。土用に入ったら炎熱の日々でした。三十日に甥の川村速水が泊りがけで遊び

に 来 ま し た 。 姉 夫 婦 の 長 男 で 、 数 え で 九 つ で
し た 。 わ た し の 生 ん だ ミ ツ が 、 戸 籍 上 と は い
え 、 速 水 さ ん の 妹 に な っ て い る と 思 う と 複 雑
な 心 境 で し た 。 早 速 、 鷗 外 先 生 に 挨 拶 さ せ ま
し た 。

「 き み も 世 が 世 な ら 武 士 の 子 だ け ど 、 も う 昔
の 世 の 中 に 返 る こ と は な い か ら な 。 商 売 人 の
子 で あ っ て も 、 勉 強 さ え す れ ば 出 世 の 門 戸 は
開 け る か ら 頑 張 る こ と だ ね 」 と 励 ま さ れ ま し
た 。 こ の 夜 、 泥 棒 の 入 っ た 気 配 が あ り 、 以 後
は 雨 戸 の 内 側 に 錐 《 き り 》 で 穴 を あ け 、 五 寸
釘 を 通 し て 連 結 す る よ う に な り ま し た 。

十 三

八 月 に な り 軒 端 高 く ノ ウ ゼ ン カ ズ ラ の 橙 色
の 花 が 咲 き ま し た 。 家 々 の 門 口 で は 犬 ど も が
気 息 奄 々 、 日 蔭 の 土 に 顎 を つ け て 臥 せ っ て い
ま し た 。 お 屋 敷 は 木 々 に 囲 ま れ や ぶ 蚊 が 多 く 、
蚊 遣 り を 絶 や さ な い で 焚 き ま し た 。 蚊 帳 《 か
や 》 の 外 を 蚊 が プ ～ ン と 音 立 て て 飛 び 回 っ て
い る の が 分 か り 、 先 生 も た だ 呆 れ て い ま し た 。

時々の夕立が待ち遠しい一服の清涼剤でした。先生は就寝前に湯浴みをなさい一日の汗を落とされていただきました。わたしは蚊遣りを焚いてやぶ蚊を追い払っていただきました。十日の晩、先生は小倉のそばの長浜村まで歩いて納涼の踊り見物に行かれました。

「タオルで顔を隠した若い女達が、印半纏《はんてん》姿で太股《ふともも》丸出しに裸足で踊っていたぞ」とその淫靡な毒気にあてられたような面持ちでお戻りでした。

「モトや、背中を洗ってくれないか」と先生から湯殿に誘われました。風呂場は母屋の外にありました。わたしは白くて薄い肌着一枚になって、お背中をお流ししました。わたしも残り湯で体の汗を流して戻ると、先生がドイツにいた頃の珍しい話を聞かせてやるから、蚊帳の中へ入って来なさい、と言いつけになりました。先生は長浜の漁村の女達の勇み肌や腿《もも》も露わな脚を見て来たばかりで、興奮が醒めやらなかったようでした。ドイツ

の思い出語りもそこそこに突如、

「モトの柔肌は、長浜の日焼けした村娘なんかと比べようがない。ほんに白い牡丹の花びらみたいだ」といきなり激しく抱き絞められ、わたしはあっ気にとられて声も絶え絶えのうち、なされるままに組み敷かれていました。鷗外先生は後年に発禁本にされた『キタ・セクスアリス』という性愛小説をお書きになった方です。お医者様でもあり、女の体の裏表の壺をことごとく知っていらっしやいました。わたしは極楽の蓮の台《うてな》の上にいるような夢心地の気色で忍び音を発し、汀の白砂を洗うような小波にだらしなく貝の殻を開いて剥き身から潮を吐き、蒲団の敷布をびしょ濡れにして悶え、先生の逞しい背中を搔きむしり、遂に荒磯の大波に襲われて汗の吹き出した肩にガブリと歯を立てて気を失わんばかりでした。やがて気が落ち着くと止めどなく涙が零れ落ちました。

「先にモトが汗を流して来なさい。特に股間

はよく洗い落としておくのだぞ」と風呂場で水浴びするよう言いつけられました。先生が水浴びしている音は、失礼して自分の蚊帳の中から聞いていました。

二十日のお台場の花火大会は先生とお庭で見物しました。その夜も赤い火花を眺めて興奮なされたせいか、激しく体を求められました。わたしと先生のこんな爛れた関係は、涼気の発する秋口まで続きました。その日が暑ければ暑いほど、夜中にわたし達の体も熱く激しく燃えました。

十四

九月の十日頃に、ようやく秋の涼気が訪れました。先生は、わたしとの身分の垣根が取り壊されたように優しくなれました。今月、先生は何度か博多や久留米に出かけられお留守の日がりましたが、特段変わったことはありませんでした。ただ、わたしの月のものが止まったので、どうしてよいのやら一人悩むことになりました。

十月に入り、先生は衛生隊の演習の統括で四日に小倉を出て、直方、赤間、芦屋などを巡って十日にお帰りになりました。わたしは悶々と一週間お留守番をしました。この十九日には小倉へ皇太子殿下の行啓があり、先生は殿下一行に供する小倉の水の衛生状態の検査や献上の品定めなどのご議論で多忙な日々でした。殿下は北九州各地の軍事要衝などを巡検され、先生もご侍従で心安寧でなかつたでしょう。三十日に殿下は小倉をお発ちになられたそうで、その際に先生は小倉駅頭で直々に労《ねぎら》いのお言葉を賜ったそうでした。

十一月になりわたしの体の悪阻は本格化しました。お庭の花壇には鬼灯《ほおずき》が真赤な実を着け、縁には唐辛子も赤く彩りを添えました。月の半ばから天高い秋日和が続き、暖かい午後には赤トンボが庭まで舞い込んで来ました。でも、わたしの心は一向に晴れませんでした。二十三日に玉水和尚と名乗

られる方が見えて、門司の松ヶ枝村畑に所在の本山曹洞宗玉泉寺の末寺で、今は廃寺となっている小倉の安国寺を再建したいと、先生にお力添えを依頼していただきました。この後、先生は和尚にドイツ語を伝授し、代わりに和尚は禅の唯識論を講じる意気投合の仲となったそうです。

十五

晩秋の冷え込んだ二十四日の朝、お庭の枯葉を掃いて初霜が降りたのを見ました。わたしは悶々と日々を過ごして来ましたが、この日の凜冽な霜を見て、先生にお暇を申し出る決心ができました。わたしのお腹が膨らみを帯びているのを先生も薄々認識なさっていたと存じます。わたしは、これまで十分よくして頂いた先生を恨む気持ちは微塵もありません。先生のご出世の障害となる身重の女となったからには、そっと引き下がるのが明治女の哀しい性《さが》であり、美德でもありません。わたしは先生からまめに長く奉公した

慰 勞 の お 言 葉 と 過 分 な 給 金 や 礼 金 を 頂 戴 し 門
司 の 姉 夫 妻 の 川 村 家 に 身 を 寄 せ ま し た 。 こ れ
か ら 姉 夫 婦 の 川 村 宅 に 同 居 し 、 近 隣 か ら お 裁
縫 の 仕 事 を も ら っ て 暮 ら し を 立 て る 算 段 が ま
と ま り ま し た 。 こ れ よ り 六 日 後 の 三 十 日 、 わ
た し は 後 見 人 の 行 橋 の 末 次 の 叔 父 夫 妻 に 身 の
振 り 方 を 変 え た こ と を 報 告 に 行 く 途 中 で 小 倉
に 下 車 し 、 鍛 冶 町 の お 屋 敷 に 居 合 わ せ た 先 生
に そ の 段 を 報 告 い た し ま し た 。

こ こ で 心 外 な こ と が 起 き て い ま し た 。 鷗 外
先 生 は 日 記 を つ け る 慣 わ し を お 持 ち で し た 。
日 記 の そ の 部 分 は 削 除 さ れ た の で す が 、 透 け
て 見 え る 薄 紙 を 貼 っ た だ け で し た の で 、 後 の
世 に 全 文 公 表 さ れ て し ま い ま し た 。

わ た し は 嫁 入 り の た め に 辞 め て 去 っ た と 記
さ れ 、 六 日 の 後 に は 嫁 入 り 先 に つ い て 詳 細 な
報 告 を し た こ と に な っ て い ま し た 。 そ の 言 葉
が 削 除 さ れ た の は 、 わ た し の 虚 言 だ っ た か ら
だ 、 と 後 の 世 の 人 達 が し た の で し た 。 そ れ は
と ん で も な い 間 違 い で す 。 わ た し は そ ん な は

したない嘘つき女では断じてありません。わたしが言ったとされる言葉を記しましょう。現代風に直しました。

【明治三十三年十一月三十日、辞めた家事手伝い女のもとが来て言った。初めてお嬢さんの家に行つて来ました。曾根駅から車で二里の悪路でした。でも、家は海に面し背後は山の景勝の地でした。ツツジの花盛りには遠足の見物人も多いそうです。夫となる方は、門司の松ヶ枝村畑の友石定太郎と申します。今は、東京商業学校に在学中で年老いたお母さんが一人で住んでいます。もとはこれからお姑《しゅうと》さんに仕えてお世話をするそうだ】

こんなのは大嘘の出鱈目です。友石定太郎という人にはお目にかかったこともありません。友石家は江戸時代の大庄屋で、れっきとした家系図があり一族の方々の生没年は一目瞭然としています。この時、友石定太郎という方は明治二十二年十月十四日生まれの十一

歳でした。十歳も年上のわたしが、どうしたご縁でこんな坊ちゃんに嫁ぎましょうか。後に、一橋大学や東京外国語大学になる前身の学校に十一歳の男の子が入学できるはずもなく、その後も在学した事実はありません。友石家は医師や学者を輩出した格式高い素封家で、下女風情のわたしがお嫁入りできるはずもないのです。これは小説家鷗外先生の作り話で、ネタ元は玉水和尚と思われます。玉水和尚は若い日に、松ヶ枝村畑に所在の玉泉寺で禅の修業をなさって友石家の事情に通じていたと存じます。なぜなら友石家と玉泉寺の繋がりは深いからです。江戸時代には友石家から十七代住職になった巨嶽慈海が出ています。寺の境内には、塾を創立し松ヶ枝村の青年達に学問を教えた『友石惕堂先生の碑』が建立されています。この先生の本名は友石延之助で、そのお孫さんがこの友石定太郎さんなのです。鷗外先生は話題の赴くまま談論風発的に玉水和尚から友石家の家系を知り、

心の引き出しに留め置いたのでしょう。でも、友石定太郎さんの年齢を確かめずに、わたしのお婿さんに仕立てたのは大誤算でした。

十六

明治三十三年の歳末が押し迫った頃、先生が鍛冶町のお屋敷から京町の民家へお引越になったとは後で義兄から聞きました。大家の宇佐美さんが家賃の値上げを言って来たのが表向きの理由だそうです。果たして本当だったのでしょうか。鍛冶町のお屋敷の近隣に妙な色事の噂がなかったことをお祈りするだけです。

先生は明治三十四年の元旦、終日三樹亭の美人姉妹を自宅に雇って祝賀の来客にお酒を振る舞ったそう。先生は本当に美貌の女性がお好きなのでした。わたしが辞めた後の先生のお世話も、宇佐美家の親戚の娘のタカという人がなされたそうですが、この方は目がロンパリで不美人だったせいか、昼間だけのお勤めで夜は帰されていたそうです。その後

も京町まで通いでお手伝いしたのでしょうか。

二月二十四日、わたしはここ数日気分がすぐれず床に臥せっていました。心配した姉はまだ寒中の最中に、ミツをおんぶして小倉京町の先生宅に、わたしの近況報告に行ってくれました。翌々日の二十六日夕刻、先生はぶらりと門司に来られたようで、義兄の正人がお会いしたと存じますが、具体的なお話は一切伺っておりません。後事は全て義兄に託しました。四月二十八日にも鷗外先生は門司に遊びに来て密かに義兄と会ったようでした。全ては先生と義兄の内緒事であって、わたしは何も存じません。花の盛りの時季になっても何を眺めるでもなく、ご近所から請け負った針仕事をして過ごし、六月になって男の子を分娩しました。義兄が清と名付けました。

わたし、木村モトが生んだ私生児の森清の誕生でございました。生来の虚弱体質で、発熱、夜泣き、下痢が続き、この子の将来を思うと憂鬱でした。晩夏の八月二十二日にも先

生は門司まで様子を調べに見えて、何処かで義兄と面談したようでした。

十七

明治三十五年は鷗外先生にとって最良の年のようでした。一月四日に東京で十八歳も年下の茂子さんを娶り、八日の日に新婚夫婦と一緒に小倉京町の家に住みました。後日に会った義兄によると、鷗外先生の令夫人は丸髷の似合う類稀なる美女であるだけでなく、豊かな教養も兼備した理想の女性だったそうでした。三月十八日に辞令が出て、先生は東京の第一師団軍医部長に栄転と決まりました。三月二十日午後、義兄は小倉に赴き先生にお祝いの煙草二箱を進呈しました。二十一日の夜は、先生ご鼻唄《ひいき》の三樹亭において、交流のあった市民有志数十名が一堂に会して盛大な送別の宴が催されたそうでした。義兄は二十五日にも正規のお餞別として文字石硯《すずり》を差し上げました。

三月二十六日夕刻六時前、先生は足かけ四

年を過ごされた小倉を後になさいました。義兄によると、お見送りしたのは小倉の師団長や小倉市長を筆頭に、実に千人もの群集が駅頭を埋めたそうでした。

さて、わたしの息子の森清は不幸せな運命の星の下に生まれたと思うしかありません。発熱と下痢はほとんど日常茶飯のことでした。前年に生んだ娘のミツが、はなから姉を母親と懐いて健やかに育つのを見るにつけ、神様は皮肉なことをするものだ、と恨みに思うしかありません。

明治三十六年七月十七日、蒸し暑い空気の中で、清は黒い便を垂れ、口からどす黒い小さな血の塊《かたまり》を吐きながら昏睡状態に陥り、わたしと川村正人、デン、速水、幼いミツが看取るなか、遂にはかなくなりました。これが鷗外先生の忘れ形見の森清のこの世で最後の姿です。清の死去は義兄の命により、世間にも鷗外先生にも伏せられました。わたしもご栄進の邪魔立てするのは不本意で

あり、それで良かったと存じます。清は川村家の菩提寺真宗三光寺に懇ろに葬られました。

翌くる明治三十七年一月二十七日、大寒の最中に姉デンが風邪をこじらせて、満三十六歳で彼岸に旅立ちました。生前の希望により生家だった行橋今井の善徳寺の寺家『庭松庵』の墓域に旧姓の木村デンの名で葬られました。義兄川村正人は明治四十年十二月二十一日に、わたしとの養子縁組を役所に届け出て、二人は義理の親子関係となりました。日本は日露戦争で勝利したのに、国費を使い果たして不景気でした。針仕事の生計も苦しく、義兄はわたしの生活を扶助するために養子にしてくれたのです。翌年、明治四十一年五月三日、わたしがいかにしても好きになれず、本人も懐かなかった実の娘のミツは、京都郡豊津村の植田吾市に養子として貰われて川村家を去りました。その時、ミツは八歳になっていました。

今、わたしは神仙界にいます。人は鬼籍に

入って初めておのれの来し方の全貌が見えて
来るのです。そう、たまには風に流れる白い
雲の上から、かつてこの世にあった暮らし向
きを懐かしみ俯瞰しているのです。

☆ ☆ ☆ ☆

付記

森鷗外が小倉に住んだ頃から、すでに百十
数年の歳月を重ねた。それは名も知れぬ庶民
の暮らし向きを歴史の闇の彼方に葬って余り
ある時間の経過である。幸い森鷗外の『小倉
日記』によって、そんな庶民の一人の木村モ
トなる女性の生き様が若干ながら浮き彫りに
できたようだ。

鷗外の遺児、森清の過去帳は川村家の菩提
寺の北九州市門司区老松十二一三番地に所在
の『真宗三光寺』に現存する。シングルマザー
一木村モトの私生児の死去であり、仮親を立
てる慣わしで義兄だった川村正人が仮親とな
った。

川村正人 妻モト

森 清 　 釈 西 露 童 子 　 明 治 三 十 六 年 七 月 十 七 日
旧 曆 五 月 二 十 三 日

生年の記載はないが、満二歳で死んだと推量される。川村正人が仮親のために、木村モトは、形式的に妻と記入されたに過ぎない。

昭和四十六年からの関門橋建設による立ち退きで、川村家の墓地が門司区大里所在の城山共同霊園に移転した。森清の墓石は、川村家の墓域に横並びに立っている。風化しているが、正面に法名の「釈西露童子」右側面に没年の明治三十六年七月十七日、左側面の下方に俗名の「森清」の文字が刻まれている。台座から全体の高さは七十九センチと小さい。

義兄川村正人との養子縁組で戸籍上は川村姓となったモトは、明治四十二年十月三日に死没した。病状も死因も詳らかでない。時に満二十九歳という若さだった。亡骸は行橋今井の善徳寺の寺家『庭松庵』の姉が眠る墓の隣に葬られた。やはり、姉と同じく旧姓の木村モトとされた。善徳寺は大正年間に廃寺と

なり、今は行橋市今井千八百二番地に所在の
浄喜寺の寺域となっている。木村デン・モト
の別々の墓は、大正三年八月一日に川村正人
の長男の速水によって、デン・モト姉妹の一
基の墓に建て直された。同居した実母と叔母
を一緒にしたのは、平素の姉妹の仲の良い姿
を瞼の裏に残していたからかも知れない。

この古びた墓の周辺は、草木が生い茂り荒
れ果てていた。とうに祀る縁戚の人々も絶え
てしまった感がある。

モトの訃報はその年の十月五日に鷗外に伝
わった。その死去の二日後のこと、川村正人
が伝達したと思われる。

「門司なる木村元（モト）の訃音到る。木村
に香典を遣る」とその日の鷗外の記事に残っ
ている。表には出せないが、森鷗外にとって
木村モトは終生忘れ得ぬ女性の一人だったは
ずである。そう、白い牡丹の花の人である。
さもなければ、九年も前の家事手伝いの女性
に香典を贈ったりしないだろう。二人の遺児

「清」のことは、できることなら鷗外の記憶から消し去りたかったであろう。

木村モトが生んだもう一人の子のミツは、八つの時に養子に出された植田家で育ち、行橋市福丸の大野作之助と夫婦になり、海女として働いていた行橋の葦島の荒磯で遭難死した。没年は四十七歳と伝わる。身重の木村モトの手伝いをした腹違いの妹イツのその後については伝承がない。川村速水は、大正九年七月二十一日に満二十八歳で夭折した。川村正人は当時としては長命で、昭和十三年二月二日に六十七歳で没した。

さて、文豪森鷗外こと軍医総監森林太郎については、ナポレオンの遠征軍に志願して参加したフランスの艶福の作家スタンダール然り「文豪・英雄色を好むものなり」の一言で片付けて構わないだろう。この小説の舞台は明治時代だが、文章を平易にするために、努めて現代用語を使用した。

参 照 文 献

① 「 鷗 外 全 集 決 定 版 」 (小 倉 日 記 の 後 記)

岩 波 書 店 刊

② 「 鷗 外 の 婢 」 松 本 清 張 光 文 社 刊

③ 「 鷗 外 日 記 ・ 考 」 兵 頭 徳 之 ・ 世 紀 共 著